

平成 27 年度 第 2 回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会 記録

日時:平成28年2月10日 11時40分～12時30分

場所:千里高校 校長室

(1) 出席者

運営指導委員

久 隆浩 近畿大学 総合社会学部 環境系専攻 教授

藤本 英子 京都市立芸術大学 美術学部 教授

管理機関 大阪府教育委員会事務局

池嶋 伸晃 大阪府教育委員会事務局 教育振興室高等学校課 総括主任指導主事

千里高校

林 伸一 校長

堀辺 慶一 教頭

大西 千尋 首席(SGH 事業推進主担当)

松井 活夫 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当)

近澤 一友 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」「国際理解」担当)

野村 真理 教諭(「探究」担当) 二井三喜夫 教諭(「探究」担当)

芦田 健 教諭(「探究」担当) 前橋 直子 教諭(「探究」担当)



(2) 次第

1, 校長挨拶

2, 本校の SGH 事業の取組状況報告

1) 実施状況:前回の運営指導委員会以降の取組について報告

2) 来年度の実施計画:来年度の実施計画の方針について報告

3) 評価の中間報告:評価指標に関わる実績・理解度・意識調査の結果・目標設定シート達成度の概要を報告

3, 指導助言

<地域課題について>

委員:千里高校ではどういうグローバル人材を作ろうとするのかについて改めて共有する必要がある。

都市開発やまちづくりの現場では、日本にある技術を海外に持っていくということがとても多い。これに対して、国連職員はコーディネイトする人材だ。質が違い、必要な素養も違う。起業をするという観点でいえば、グローバルな問題だけではなく、身近な所で起こっている社会のニーズを的確に捉えてそれにユニークな解決方法を載せていく能力が必要とされる。それができれば世界中のどこに行ってもいろんなアイデアが生まれてきて社会貢献ができる。3つとか4つの目指すべき方向性があるって良い。そこをうまく整理しながら統一性を図っていくのがいいと思う。

委員:私も、是非地域課題の解決というところに立脚してやっていっていただきたい。地域の問題は世界の問題に必ず繋がっている。会社の経営の話だと高校生が取り組んでも社会の情報を聞いたことを発表しましたという感じになり、すぐくもったいない。

<グループワークについて>

委員:2つ目は、ぜひ、グループとして活動すると、こんなに面白くこんなに発展するんだという体験をこの世代でして欲しい。特に、課題発見のところ、ディスカッションしていくとすごく面白いし、いろんなものが出てくると思う。そういうことを最初の時点で、「地域のことを考える」というテーマで体験してもらえたらと思った。それには市議会や府議会を見に行くが良い。また、探究した後、どういう形で提案していけばいいかを考える場面で、自分が提案をしてそれに対するグループワークは意

味がある。

<フューチャーセンターについて>

委員: こういう工夫としてフューチャーセンターというスペースを作った高校がある。みんなが集まってきてアイデアを出していく場所や雰囲気を作っていくやり方だ。面白いのは、単に集まって話をするだけではなくて、生徒のモチベーションが上がってきて学力もアップしてきた。ただ、そういう発想ややり方と探究は少しベクトルが違うので、これは整理しておかないといけない。

委員: フューチャーセンターは、ブレインストーミングのワークショップだ。アイデアを出しあいながら、PostIt を貼りながら発展させていく。常にそういうことができるスペースを作っておく。さらにどこかのグループがやった成果を壁に貼っておく、そこを通った生徒がこんな議論があったのだと知って自分の感じたことを書き込む。こういうことができるスペースを校舎の一角に作ったのです。アイデアを張れるように、ホワイトボードやコルクボードを用意してある。人が通って見られるようなオープンスペースの方がいい。

委員: 私も関西フューチャーセンターのメンバーです。そこで活動しているグループがあるので、お声掛けをされたら、ノウハウを持った人たちが、すぐに何かやりに来てくれると思います。

委員: 探究のような授業の中で使っています。また、学校で起こっている問題を自分たちでどう解決していくかといったワークもある。

委員: 自分たちで考えていて行き詰まった時や問題を抱えた時に、「じゃあフューチャーセンターへ行こうよ」という感じです。そこに機材が置いてあって、「1時間ほど話をしようか」というように自由に使える場所がある。

委員: 協力している NPO の人が常駐している。文科省から補助金をもらっている。必ずしも常駐は必要ないが、いると、アドバイスができる。

<本校の今年度の探究講座でのグループワークについて>

教員: 私の講座ではやっていませんが、テーマ設定のところ、広げるのに必要だったかなと思う。1年の段階であると良いと思う。

教員: 1、2年の両方を担当している。1年の後半では、明らかにそれを意図して指導計画担当の先生が計画を組んでおられるなと思った。今のお話とほぼ合致する。まず、主題であるグローバルコンパクトに関して、あなたならどんなことを考えますかということを書かせて、その後タブレットで調べさせて、とにかく疑問を持ち寄って疑問のペーパーを回し読みして、その中で誰のが一番興味深かったのかをグループで投票して、それをみんなで意見を出し合いながら深めていこうという手順にした。今年は意図して計画を組んでいると感じている。次年度以降ステップアップしていけるように思う。

教員: 私の講座は最初グループから始まって、グループごとに別々の国に現在派遣されている青年海外協力隊の人とコンタクトをとって、その国の情報を知る中でそれぞれ問題点を考えさせ、プレゼンにまとめることを最初にやった。その中からテーマを見つけるというのを基本にした。違うテーマに行った生徒もいたが、今回発表したうちの何人かはそこからさらに深めてという形になっているので、取り掛かりはグループで始まったかなと思う。水問題を取り上げた生徒も南アフリカの例からヒントを得た。南アフリカでも都市部と農村で非常に格差があるという問題をみんなで取り上げていた。そこから彼は水問題を取り上げたと思う。

教員: 私の場合は最初の導入の際にグループワークを2週にわたってテーマ設定に利用した。本校の探究は従来 4000 字のレポートを最後に仕上げるということをゴールの一つにしている。だから、最終的には個人個人の研究をすることになる。テーマ設定のところできていたグループから最終的には一人一人全然別々の課題を選んで行っている。おっしゃるようにどこかで同じようなテーマ

の生徒が集まってアイデアを出し合ってまた個人に持ち帰ってということがあったらよかったかなとお話を聞いて思った。

教員:私の講座は、個人とグループを繰り返して何度かやりました。初めはバラバラの花を選んだりしたのですが、グループにしたら同じ花が面白くなったり、一緒にやることで全然違う花に興味を持ったりしていました。まいったなと途中で思ったのは、みんなが「やっぱり桜がやっぱりええやんな」みたいな感じに、桜にどーんと流れたのが、どうしようかと思ったのですが、同じ桜でも全然違う切り口に次また別れて行って、何人か桜をやっておりますが、それぞれ違うんです。でも違うところに行っただけ最終的には帰ってきたゴールは文化とか割と似た所に、違う活動をやっている帰ってくる所は似ていて、探究活動としては割とうまく行ったかなと思っています。

<その他のアドバイス>

委員:今後の連携先に関して、情報提供を兼ねて話をしたい。先ほど JICA の話が出たが、これはやはり北大阪のメリットだと思います。これを生かすのは千里高校の特長になると思う。国連の機関でも日本国内にいくつかある。一つが、国連地域開発センター。これは名古屋に本部があります。地域開発なので我々の専門領域の中にあります。UNCRD 国連地域開発センターなんかとコラボすると、費用かからずに年に何度もいろいろ情報交換できると思います。国連環境計画の国際環境技術センター (UNEP/IETC)が大阪の鶴見緑地と大津の烏丸半島にありますから、こういう所ともコラボすれば密に連携が取れると思う。それから、地域でグローバルNPOをまとめている関西国際交流団体協議会、ここに声をかけると百数十団体のネットワーク組織ですから、いいところを紹介してくれる。効率的に大阪にある国際交流団体とネットワークが作れる。

委員:卒業生でもいろいろなところで関わっている人がいると思うので、その辺の情報交換がスムーズにネットワークでできればいいなと思いました。だから、課題を学校内で抱えられるのではなくて、情報収集のところではもっと外に助けを求めてもいいのではないかと思います。身近にも無料で使えたり、交流を持てたりするところもあるかと思います。ぜひ学生たちにリアルな体験、生の話を聞く機会を加えていかれたらいいのではないかと思います。

4. 謝辞

<報告内容の骨子>

1) 前回の会議(10月21日)以降の実施状況

A 1年生関係

①「探究」中間発表に合わせ2年生のレポートを読んでコメントを書く→10月実施

② ニューヨーク研修(1年生4名, 2年生6名合計10名を派遣。)

→1月2日～7日実施。事前事後学習も実施。

テーマ:

より良い社会を作るために人間の『違い』にどう向き合うべきかを、アメリカの企業・企業コンサルタント・人権団体及び国連機関の取り組み、そして移民の歴史を通して学ぶ

主な研修訪問先・講師:

①チャイナタウン, ウォール街, グラウンド・ゼロ, ②多様性と受容(diversity and inclusion)に関するコンサルタントで、大企業の管理職へのコーチングもしておられる Tanya Odom 氏, ③④移民の歴史を紹介する Museum Of Chinese in America と Tenement Museum, ⑤ADL(アメリカ随一の市民権擁護に取り組む団体)〈ワークショップ〉, ⑥コロンビア大学, ⑥国連本部, ⑦本校5期生で元国連職員沼田隆一氏, ⑧世界最大のマーケティング会社 Ogilvy & Mather 社・Diversity & Inclusion 部門取締役の Melissa Ng 氏, ⑨国連グローバルコンパクト本部

③ 特別講演「世界が求めるあなたの力～現代社会を多元的な視点で読み取り行動できる人間

に！」関西学院大学総合政策学部教授村田俊一教授→2月9日実施

- ④ 児童労働の実情と解決への取組を知るドキュメンタリー映画による学習→2月9日実施
- ⑤ 学年末発表会で「探究基礎」の学習成果をディベートと掲示により発表。→2月10, 12日実施
- ⑥ 学年末発表会で2年生の研究を20～30見学→2月10, 12日実施

B 2年生関係

- ① 「探究」講座で大学院生が TA として指導→11月及び1月に実施
- ② ニューヨーク研修(1年生の項で既述)
- ③ 特別講演「世界が求めるあなたの力～現代社会を多元的な視点で読み取り行動できる人間に！」(1年生の項で既述)
- ④ 学年末発表会で、タブレットの利用により110の全課題研究を分科会形式で発表
→2月10, 12日実施

C 3年生関係

・新科目「グローバルスタディーズ(GS)」の開講準備

TOEFL 対策および時事問題を通して英語による対話力を育成する授業
今年、SGH 事業とのコラボレーションを通して授業テーマを共有した。

- ① NY 研修の事前事後学習の指導を GS 担当教員が SGH 担当教員と共同実施
- ② GS 準備の為に課外講座である「TOEFL クラブ」にて、課題研究の英語での発表と NY 研修の英語での報告を指導

2) 今年度の評価

3) 来年度の実施計画

- ・基本的には今年の事業を改善しつつ実施する。
 - より組織な動き
 - 評価基準の共有
 - 指導方法の集団的検討
 - 計画の修正 (海外研修, 対象生徒の設定等)
- ・ 3年目で発展を図るために調査・準備を進める。
 - 地域 NGO, 地域企業団体, 地方自治体との連携
 - 大学との連携のパイプを太く, チャンネルを豊富に
 - 海外大学, 海外高校との連携